

内田篤貴⁽¹⁾・浦谷裕明⁽²⁾、小川典芳⁽²⁾、中川進一郎⁽²⁾、武村雅之⁽³⁾、都築充雄⁽³⁾

(1)日本物理探鑛株式会社 (2)中部電力株式会社 (3)名古屋大学減災連携研究センター

1. はじめに

「契きな かた身に袖をしぼりつつ 末の松山 浪越さじとは」という清原元輔による歌がある。今から1000年以上前の869年貞観の地震による津波が超えることのなかった「末の松山」に因んで詠まれたものである。

「末の松山」を決して波が越さないように、行末までも心変わりすることは絶対ないことを詠んだ歌である。2011年東北地方太平洋沖地震の津波も「末の松山」を超える事はなかった。

地震史料は、時代が古くなるほど減少する傾向である。しかし、地震像を正確に捉えるために、古い時代の史料も重要になる。

本研究は、1707年宝永地震や1854年安政東海地震などと比較して史料の少ない1498年明応地震の津波について、現地調査を実施したので、その結果を報告するものである。

2. 調査方法

調査は、静岡・愛知・三重の東海地域について、言い伝えも含めた史料の収集、関係者からの聞き取りおよび現地の確認を行っている。

3. 経過報告

地点別の調査経過は以下のとおりである。

①静岡県沼津市江梨・大瀬崎

これまでこの地では、江梨航浦院門外で女子が被災したとされてきたが、「順禮問答」(写し)によると、この女子は鈴木氏の娘で、沼津藩士に嫁つぎ、津波にあい、病気の快癒を航浦院に願いでたものであった。

また、津波で皆流出したとされる鈴木氏の館は江梨だけでなく、大瀬崎にもあったことがわかった。

②静岡県沼津市戸田(ひらめ平)

都司(2011)において津波高さの根拠としている伝承は、「弥吉じいさんの昔話」という本に書かれていた。「何百年か何千年か前の大昔に地震があり、大津波が起り、ここに大量のヒラメがあがった(中略)ことから、平目ヶ平と言うようになった。また、古老達は、「上の峰岸というところに昔は船が着いたこと」や「中上の下の方をママ(水深の深い所をいう)と言い、今でもママという人がいること」などを教えてくれました。」という資料および現地を確認した。

③愛知県豊橋市牟呂、高師

飯田(1980)に示されている牟呂大西の素盞鳴

神社は、資料によると開元親王を奉ったものであり、「大西天王社」と呼ばれ現存していた。また、その史実を物語る地名が多く残されていることがわかった。牟呂は洪積層から形成され、台地の周囲には貝塚が発達し、かつての牟呂は、海に面していた。

昔の小字、埋立ての状況および地形地質から、地震当時の素盞鳴神社の位置を検討したところ、神社も海沿いにあったと考えられる。

また、飯田(1980)が示す高師は、「豊橋市史」によるとかつては高足と書き、港町が形成されていた。

④愛知県田原市常光寺

明応地震当時、常光寺は現在の城山の麓よりも南側の海沿いにあり、天保3-4(1832-33)にかけて現在の地に移された。応永22(1415)年より書き綴られた「常光寺年代記」では一年の出来事を数行の記述として書かれており、明応地震津波の被害については、概略的に書き記されたものと考えられる。

⑤大湊

津波被害にあった大塩屋村は、「伊勢大湊の今昔」によると現在の宮川河口、榎原新田の東側にあった。明応地震津波により荒廃した田畑を再興したが、1707年宝永地震により再度津波被害を受け、西の川が形成されるにいたり、大塩屋は地名から消え去ったことがわかった。

⑥その他

これまで朝比奈や掛塚での被害記述と考えられていた、松堂隆盛が記した「圓通松堂禅師語録」の地震および津波被害は、「示衆之類」なる章の一節であり、地震後7年程度経過し、松堂隆盛が他界する直前に、明応地震について概括的に触れた記述であると考えられる。

4. まとめ

現在まで、「3. 経過報告」で取り上げた地点などについて調査を実施してきた。今後、更に調査を実施し、順次報告していきたい。

謝辞

今回の調査にあたり、社団法人東三河地域研究センター加藤勝俊常務理事、佐藤克彦主任研究員、沼津市市史編纂室の佐藤さん、金子さん、沼津市教育委員会文化振興課筒井久美子学芸員の皆様からは有益なご意見をきかせていただきました。ここに記して感謝いたします。